

こちら あみ子

「応答せよ、応答せよ」あの頃の私が呼んでる。



大沢一葉 井浦新 尾野真千子

監督・脚本：森井勇佑 | 原作：今村夏子（ちくま文庫） | 音楽：青葉市子

奥村天晴 大関悠士 橘高亨牧 播田美保 黒木詔子 一木良彦

企画・プロデューサー：近藤貴彦 | プロデューサー：南部充俊 飯塚香織 | 撮影・照明：岩永洋 | 録音：小牧将人 | 美術：大原清孝 | 編集：早野亮 | 衣裳：鎌倉尊樹
ヘアメイク：寺沢ルミ | 整音：鳥津未来介 | 音響効果：勝亦さくら | スチール：三木匡宏 | 助監督：羽生健博 | 宣伝：平井万里子 | タイトルデザイン：赤松陽博
協賛：PBU 和光工業 杉本酒店 都北運輸 恵泉グループ famille soin

AFF 文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業

製作：ハーベストフィルム エイゾーボ アークエンタテインメント TCエンタテインメント 筑摩書房 フェーレック | 製作プロダクション：ハーベストフィルム エイゾーボ
配給：アークエンタテインメント | 2022年/104min/カラー/ヨーロッパビスタ/5.1ch. ©2022「こちらあみ子」フィルムパートナーズ





たのしいこともさびしいことも——
あみ子が教えてくれるのは、
私たちが“かつて見ていたはずの世界”

主人公は、広島に暮らす小学5年生のあみ子。少し風変わりな彼女のあまりに純粋な行動が、家族や同級生など周囲の人たちを否応なく変えていく過程を鮮やかに描き出す『こちらあみ子』。

原作は「むらさきのスカートの女」で第161回芥川賞を受賞した今村夏子が、2010年に発表した処女作「あたらしい娘」(のちに「こちらあみ子」に改題)。本作で太宰治賞、三島由紀夫賞をW受賞して以降、新作を発表するたびに現代文学ファンの間で大きな話題を呼んでいる。

主人公のあみ子を演じるのは、応募総数330名のオーディションの中から見いだされた新星・大沢一菜。演技未経験ながら圧倒的な存在感で“あみ

子の見ている世界”を体現し、現場の自由な空気の中でキャラクターをつかんでいった。両親役には、日本を代表する俳優である井浦新と尾野真千子。監督は、大森立嗣監督をはじめ、日本映画界を牽引する監督たちの現場で助監督を務めてきた森井勇佑。原作と出会って以来、映画化を熱望してきた監督が、原作にはないオリジナルシーンやポップでグラフィカルな映像描写で新たな風を吹き込み、念願の監督デビューを果たす。そして、繊細な歌声とやわらかなクラシックギターの音色で聴く者を魅了し続け、国内だけでなく海外からも人気を集める音楽家、青葉市子が音楽を手がける。



芥川賞受賞作家
今村夏子の
デビュー作を映画化

感情と感性を刺激する映像と共に描く
無垢で、時に残酷な少女のまなざし

あみ子はちょっと風変わりな女の子。優しいお父さん、いっしょに登下校してくれるお兄ちゃん、書道教室の先生でお腹には赤ちゃんがいるお母さん、憧れの同級生のり君、たくさんの人に見守られながら元気いっぱい過ごしていた。だが、彼女のあまりに純粋無垢な行動は、周囲の人たちを否応なく変えていくことになる。誕生日にもった電池切れのトランシーバーに話しかけるあみ子。「応答せよ、応答せよ。こちらあみ子」——。奇妙で滑稽で、でもどこか愛おしい人間たちのありようが生生きと描かれる。

ひとり残された家の廊下で。みんな帰ってしまった教室で。オバケと行進した帰り道で。いつも会話は一方通行で、得体の知れないさびしさを抱えながらもまっすぐに生きるあみ子の姿は、常識や固定概念に縛られ、生きづらさを感じている現代の私たちにとって、かつて自分が見ていたはずの世界を呼び覚ます。観た人それぞれがあみ子に共鳴し、いつの間にかあみ子と同一化している感覚を味わえる映画がここに誕生した。

10/28(金) ~ 上映決定

キネカ大森

03-3762-6000

https://ttcg.jp/cineka_omori/